

本日は、中村先生の最終授業となる。配布資料は「戊辰戦争」であるが、授業は「大政奉還」から、1867年11月から1869年5月までをわずか2時間で解説していただきました。

### <講義の内容>

- ・大政奉還は1867年11月15日に慶喜が参内し勅許。但し慶喜は大政奉還後も徳川が政治の中枢に残るものと考えていた。慶喜側近の西周(にしあまね)の「議題草案」に記述あり。
- ・しかし12月9日に「王政復古」の政変が発生。「摂関・幕府」などの廃止が決定された。続く小御所会議では、山内容堂の反対があったものの、「徳川慶喜の官位辞退」「徳川宗家領の削封」が決定された。新政府が樹立されたことを受けて、前将軍慶喜は12日に大阪城に下る。
- ・この段階ではまだ旧幕府や慶喜勢力が健在であったので、薩摩藩は戦いに持ち込むため、江戸で佐土原島津家が庄内酒井家屯所に発砲し、酒井家に薩摩屋敷を放火させた。こののち、鳥羽伏見で戦争が始まるが、「戊辰戦争」の緒戦は品川沖海戦と合わせ、江戸で始まったと言える。
- ・1868年1月2日、慶喜は「討薩の表」を持たせ会津・桑名両藩の兵を主力とする大軍を京に差し向けた。3日、鴨川にかかる旧小枝橋で鳥羽の戦いが始まる。鳥羽の砲声が聞こえるや伏見の御香宮神社に陣を構えた薩摩軍と伏見奉行所に入った旧幕府軍や新選組等との間で伏見戦争開始。数で勝る旧幕府軍であったが、新政府軍の立てた「錦の御旗」を見て士気が下がる。
- ・この状況を受けて6日夜、慶喜は会津容保、桑名定敬らと軍艦開陽丸に乗り江戸に向かう。11日慶喜一行が品川沖に着く。23日に勘定奉行小栗忠順を罷免し、大久保一翁を会計総裁勝義邦を陸軍総裁とした。名古屋での「青松葉事件」もあり、慶喜は挽回不可能と認識した。
- ・慶喜には挽回のチャンスがあったが、2つのミスを犯してしまったと考えられる。
  - (1) クーデター(政変)の計画を知らされていたが何もせず、大阪に行ってしまったこと結果的に、天皇を新政府側に取られてしまった
  - (2) 「討薩の表」をかかげてしまったこと。結果的に、朝敵となってしまった
- ・新政府の樹立によって、外国人居留地の管理も旧幕府から新政府に移行するが、外国人の扱いに不慣れなこともあって、「神戸事件」「堺事件」「縄手事件」など、外国人に対する殺傷事件が起こった。新政府は問題を起こした者を厳しく処罰したので、外国から信頼を得るきっかけとなる。(「堺事件」は森鷗外が、「縄手事件」は三島由紀夫が小説にしています)
- ・1868年3月勝・西郷会談。パークスからの圧力もあり、江戸城総攻撃は中止となった。
- ・1868年4月江戸開城。慶喜は水戸へ。5月15日、上野戦争。新政府軍が1日で勝利。
- ・1869年(明治2年)正月、島津、毛利、山内、鍋島の4侯が「版籍奉還」の上奏。
- ・1869年(明治2年)5月、箱館を総攻撃、榎本武揚らが降伏し、五稜郭開城。戊辰戦争終結。

### <中村先生からの最後のアドバイス>

- ・幕末の歴史については、まだ十分とは言えないものの、この20年で大きな進化を遂げました。この授業では、この成果を見せたいという思いでやってきました。歴史は事実に基づいて語る必要があります。小説やTVドラマを鵜呑みにしてはいけません。結果を知って振り返るのではなく、その時々で、各登場人物が、どのように思いどのように行動したのかを考えてみてください。

半年間、楽しい授業をありがとうございました。最後は生徒全員の大きな拍手でお礼しました。